心が深いので虚仮の心も疑心も不定の心も起こらないから一心であって、『観経』は浄土の行が初めてで浅い人のために、虚仮心を停止させるために至誠心を、疑心を停止させるために深心を、不定の心を停止させるために回向発願心を説いたのであると言い安心の広略を説いた。これは横堅の三心と同義である。先に述べたように、聖光の意は一心と三心の関係から『浄土三部経』の心を引き出したかったのではないかと思われる。

補足すれば、『西宗要』の「第十六　阿弥陀経念仏往生機事」（『浄全』十、一六九頁下）に『阿弥陀経』の一心についての細釈がある。

ここでの問題は『阿弥陀経』を説いた対象としての機は何かということである。つまり一心不乱と言うからには定善の機を対象に説かれたものであるとする考え方に、聖光は一心とは定散にわたるものとして捉え、定善とは心を一つに凝縮することを言うが、今ここで言う一心は散心の中に雑行を止めて一向念仏することとし、散心を止めて定心になれと言うのではないと断定している。

第六項　能化（のうけ）の三心・所化（しょけ）の三心

聖光の言葉でもう一つ注目したいのが、この能化の三心・所化の三心という言葉である。なぜなら、これは他の法然門下との思想の違いを明確に端的に示す言葉だからである。この

言葉は『西宗要』「第十一　三心具足文事」（『浄全』十、一六〇頁下）に出る。これによって、なぜ衆生が三心を具さねばならないのかを説明しているのである。

その理由は、仏が至誠心をもって一切の衆生を決定往生させようと本願を起こしたのであり、仏が深心をもって決定往生させようと願った念仏であり、疑心を持った念仏には往生の願と相応しないから往生を許さないのである。すなわち仏は三心をもって決定往生の念仏の本願を立てたのであり、念仏の行者が三心を具さないというのは能化（仏）の三心と所化（念仏行者）の三心が相応しないので往生はできないと論じているのである。

第七項　まとめ

聖光の三心論を理解するためのキーワードとして「自然に具する三心」「一向専修」「横の三心」が挙げられる。その思想から見られるものは、無智な人がいかに救われるかということであり、それは横の三心によって自然に容易に三心が具わる一向専修の身になることが一番の近道であるということである。

そこには常に散心のままでの往生が強調され、往生行としての念仏が正しく本願に相応するための三心の在り方が力説されているのである。

また、聖光は行と三心について『西宗要』の「第九　安心起行事」（『浄全』十、一五六頁